

短期大学生の職業意識の変化

－ブライダル専門学生と司書課程学生の比較研究－

(第三報)

木 内 公一郎
増 田 榮 美

第1章 研究の目的

この論考は上田女子短期大学総合文化学科の学生の職業的社会化の過程を研究し明らかにすることが目的である。特にブライダルコーディネーターを専門とする学生、司書課程の学生をインタビュー調査し、両者を比較検討する。

第1節 職業的社会化

職業的社会化について、山村、天野は次のように定義している。「職業に従事する上で必要とされる知識や技術を取得し、それぞれの地位に伴う役割を遂行するために制度化された行動様式や価値を内面化していく過程である。その結果、職業をもつ社会の成員としての自我が確立していく。その自我は自らの能力を発揮し、社会的承認を獲得しながら、自己実現に努める。この過程で自我は職業上のアイデンティティを形成する。」¹⁾

つまりそれぞれの職業の知識や技能を身につけるとともに、職業上の地位に附属する価値や行動を自分のものとして内面化していくプロセスである。それ同時に社会の構成員としての自我が確立して、社会からの認知を得て、自己の成長を促して行く。

この自我の確立を「職業上のアイデンティティ」、「職業的同一性」ともいう。「自分はどのような人間か」、「自分にとって仕事とはにか」、「仕事を通じて社会にどのように関わりたいのか」などの主体的な意識をいう。

この定義に沿って考えると、職業的社会化は職業に就く前の段階からその職業生活

を終えるまで続いて行く。

この研究は職業を意識し始めた時期からそれが具体化していくプロセスを追跡調査する。

第2節 研究の意義と目的

われわれは職業意識の変遷は個々の事例を深く追求することでそのプロセスと構造が理解され则认为している。そこでこの研究では宮脇らの研究方法²⁾を参考にする。学生に協力してもらい、インタビュー調査とジャーナル記入を定期的に行い、質的なデータを収集する。これをGTAによって分析する。そこから得られたデータから概念を抽出する。最終的な到達点としては、学生に対してどのようなタイミングでどのような支援を行うことが適当かを明らかにすることである。

なお、今回は最終調査であり、研究全体のまとめを行う。

第2章 研究の方法と調査の概要

第1節 GTAについて

研究方法としてグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)を採用した。GTAとは、データに密着した分析から概念、理論を生成する定性的な研究方法である。社会学者のグレーザーとストラウスが開発をした¹⁾。GTAはゼロの状態から収集されたデータを基本にして理論を構築するため、未開拓の分野を研究したり、特定の領域についての理論を構築したりすることに最適である。

特徴としてあらかじめ特定の理論に依拠するのではなく、データに即した理論の構築を行うこと。②継続的にデータの収集と分析を行うこと。③データを質的に分析する④あらゆる記述的なデータを対象とすることができる。⑤特定の分野についての理論構築に適している。

この研究ではインタビューデータとジャーナルを分析対象とし、1年間継続的にデータ収集と分析を実施する。調査は全3回実施され、第1回は2011年3月、第2回は2011年8月、今回の第3回調査が最後であり、2012年2月から3月にかけて実施された。インタビュー調査は司書は木内、ブライダルは増田がそれぞれ個別に実施した。

第3章 インタビュー調査の概要

第1節 ブライダル専門学生

1. 調査の概要

インタビュアーは研究者、インタビュイーは短期大学の観光・ブライダルフィールドを専攻している2年生である。今回は、研究の趣旨を理解し、入学1年後のインタビューの他、ジャーナルの提出、2年生夏休みのインタビューを実施した4人のうち、就職先の研修の都合により辞退した1人を除く3人に加え、これまで分析してきた学生と比較するため、違うタイプの学生3人に研究の協力に同意を得てインタビューを行なった。

3回目になる今回の調査は、卒業を前にして就職先での研修や課題があることを配慮し、各1回、1人30分程度の個人インタビューとなった。ジャーナルは、進路への迷いや不安、進路変更など状況が変化した際、随時メール添付にて送付してもらうこととした。

インタビューの内容は録音することに同意を得て、その後逐語テープ起こしを行い、本研究の質的データとした。学生のプライバシー保護のため、氏名の明記は避け、アルファベットを用いることとし、内容については希望により削除を行なっている。

2. インタビューの分析

2年間の課程を修了した時点での今回の調査では、ブライダル専門職を諦め視野を拡大して就職を決めた学生も、諦めずに最後まで専門職を目指した学生も、専門的な授業や卒業研究、実践型の授業、サークルやアルバイトなどの活動により社会化が進み、自分の社会人としての価値や態度を内面化し成長していることが感じられる結果となった。第2報では進路指導の課題が浮かび上がったが、本論文では、同様に課題はあるものの成果も確認された。さらに、短期大学（以下短大）での学びに満足し、充実感を覚えていることが窺え、短大進学を選択した自分の進路選択や2年間の学びに対して自信が持てるようになり、将来に対して前向きに捉えていることがわかった。

表1は聞き取り調査の分析をするにあたり、学生の進路指導状況をまとめたものである。

表1 学生の進路指導状況

学生の進路指導状況

	就職セミナー出席状況*1	キャリアコンサルティング状況	調査時点(2012/2)の進路
学生A	◎	1～2回のみ	アパレル
学生B	◎	複数回(影響大)	流通(スーパー)
学生D	○	1～2回のみ	ブライダルコーディネーター
学生E	△	一度も受けない	ブライダルコーディネーター
学生F	◎	1～2回のみ	ギフト卸(ブライダル産業)
学生G	△	1回のみ	就職活動中(ブライダル産業)

*1 ◎毎回出席 ○ほとんど出席 △ほとんど出席せず ×出席せず

学生のインタビューをコーディングし、そこから導き出されたカテゴリをまとめたものが表2である。

表2 カテゴリ表

カテゴリ	コード
就職活動による職業的社会化	【就職活動で進んだ自己分析】 【就職活動は情報交換の場】
環境に左右される就職活動	【友人の行動に左右される就職活動】 【キャリアコンサルタントとの人間関係】 【就職活動を妨げる厳しい経済事情】
ブライダル専門職の問題認識	【ブライダル専門職の求人数と求人時期】 【諦めきれないブライダル専門職】
就職活動に揺れる心	【就職活動中の焦り、不安、甘え】 【ゼミナール担当教員の役割】 【就職活動からの逃避】
進路指導の課題と成果	【キャリアコンサルタントへの戸惑い、不信任感】 【キャリアコンサルタントの情報不足】 【受け身の進路セミナー】 【進路指導室の利用方法】
進路指導室に求めるもの	【きめ細かさが必要な進路指導】 【就職活動に対する進路室と学生との気持ちのギャップ】 【体験学習で進んだ自己分析】
実践的な授業や学内外の活動による成長の跡	【体験学習やサークル活動による職業理解の深化】 【体験学習やサークル活動による就職への動機付け】 【体験や実践で進む職業的社会化】
学んできたことの意味づけ	【体験学習により得られた学びに対する充実感】 【ブライダル専門課程での学びに対する充実感】 【検定試験へのモチベーション維持】 【ブライダル専門職内定によるモチベーションアップ】 【視野が広がった2年間の学び】 【卒業研究は学びの集大成】
短大進学は積極的な選択	【2年間だからこそ充実していた短大生活】 【専門学校より魅力的な短大】～選択肢が多い短大での学び～
仕事と学びの切り離し	【将来の仕事としてのブライダル】

(1) 就職活動による職業的社会化

これまでの報告にもあるように、学生は専門課程の授業や学内外の様々な体験によ

り社会化が行われてきたが、特に就職活動によって進んだことが確認された。

就職活動においては自己分析が必須であり、それにより職業選択が行なわれるため、それが社会化に影響を及ぼしていることが示唆された。また、合同企業説明会などの情報交換が職業理解の深化につながり、社会を間近に感じる機会となっていることがわかった。

1) 就職活動で進んだ自己分析

自分に向いている企業や職種を探す上で大切なのが自己分析である。第2報でも述べた通り、就職活動により様々な企業の説明を受けたり試験を受けたりする中で自己分析が進んだ結果、自分に向いている企業や職種を見つけることができた。

学生Bは「就職活動し始めたら、自分を見返さなきゃいけないじゃないですか。その中で職業選んだり調べたりするのも勉強になりました」と語っている。また、「何を優先にしているか書き出して分析するところから始めて。何をすればいいかわからないってところが一番悩みました。自分がやりたいことが少しずつ見えてきたら業種研究とか業界の研究ができるようになりました」と述べており、短大生は2年間という短い期間で卒業するため、自分が何をしたいのかわからないまま就職活動を始めるため悩んでいることがわかる。その結果、自分を振り返る作業を通して社会を知り、充実感を抱いたようだ。

学生Gは「就職活動して学んだことは自己分析ですね。自分のことよく知れました」と、就職活動を学びと捉え、自己分析が進んだことを認識したようである。その結果、ブライダル専門職への気持ち強いことが確認できたため、諦めずに専門職への就職を目指して活動を続ける決意をし、最終的にはブライダル施設への就職を果たした。

2) 就職活動は情報交換の場

就職活動において、特に合同企業面接会では様々な企業の人事担当者と話をする機会が用意されている。短大生の場合、まだ1年生のうちから参加しなければならず、就職活動への抵抗感が強くなかなか足を運べない学生が存在することはこれまでも述べた。しかし、2年生になり否が応でも就職活動をしなければならない状況下にお

かれると、間直に迫る社会を感じながら社会化が進み、就職活動に対しても情報交換ができる有意義なものとして捉えられるようになっていた。

学生Aは、「決めるのもすごい迷ったから、セミナー行っている人々と会うと違う情報が入ったり、いろいろな人との関わりが持てたので情報交換は勉強になりました。あんまり動いていなかったら今のバイトもしてないと思いますし。そこで内定に結びつけられましたね」と、迷うことが多い就職活動の中で、様々な人とのコミュニケーションや情報交換・収集が有益だったことが窺える。学生Dも「合同説明会で説明してくれる人事担当者の方とか、いろんなことを話せるのもっと気軽にたくさん企業の説明会に行っておけばよかったと思いました」と、自分の興味に関わらず、様々な情報を得ることが大切であると感じたようである。

(2) 環境に左右される就職活動

1年生は、社会人としての基本的な価値や態度を取り入れるのが精一杯で、プライダル専門職に必要なより専門的な価値や態度を内面化するのは難しいのが現状である³⁾。2年生は専門的な授業内容の内面化や、就職活動を通して行われる自己分析が、職業の社会化に影響を及ぼしており、加えて、そこに関わる人との交流や環境に大きく影響を受けている。短大は2年間しかなく、自己分析や職業選択に費やす時間が十分に取れないため、他者からの意見やアドバイスに流されやすくそのまま職業の社会化に影響してしまう傾向がある。就職活動が円滑に行われている学生については、特にキャリアコンサルタント(以下CC)のアドバイスに影響を受けていた。しかし、就職活動が思うように行えなかった学生は、友人の影響がいちばん大きく、さらにCCからは、アドバイス内容ではなくて、人間関係が築けないことでの影響を受け、それが進路指導室から足が遠のく要因となってしまったことがわかった。

1) 友人の行動に左右される就職活動

進路セミナーやコンサルティングなどの就職活動支援に関して積極的でなかった学生は、親しい友人の行動に左右されていることが確認された。

学生Eは、「周りの影響ありますね。みんなやってなかったしセミナーも出てなかつ

たですよ。周りがやったり内定出てたらもっと焦りますね」と述べており、最も親しい友人が誰も就職活動をしていないことに安堵して自ら動こうとしなかった。しかし、周囲に内定者が始まったことを知り「夏ごろ焦ったんですよ。周りに内定者が始まって。それで焦って1社受けたんですけど書類で落とされて。ああ、厳しいって思って」と、厳しい現実を知り、焦りを感じた様子が窺える。また学生Gも、「セミナーは出てなかったです、あんまり。みんなも出てなかったから出なかったからです。周りの影響ですね。コーディネーターがやりたいって思ってたし、就職活動の流れとか知れてよかったんだけど、友だちに引きずられて行かなかったんですよ」と、楽な方に引きずられている様子が窺える。

2) キャリアコンサルタントとの人間関係

就職活動が円滑に行われた学生であっても、CCとの相性が原因でコンサルティングを敬遠してしまった学生がいたが、就職活動をしていなかった学生はそれを契機に活動自体を停滞させる原因となってしまった。

学生Eは「キャリアコンの人で一人苦手な人がいて。直接話したことないですけど。友達がその人嫌だっていう話を聞いたら、すごいやだくなって。ズバズバ言って傷つくって。だからセミナーもキャリアコンもやめちゃって」と、CCとの相性が悪いことが原因で就職活動自体から遠ざかってしまった。注目すべき点は、直接話をしていないのに、自分の感じた印象と友人からの噂が合致したことにより敬遠してしまったことで、友人からの影響が大きいことが窺える。また、学生Gも「ビシビシだったんで、1回でやめました。なんで自分のことがわかんないのって言われちゃったりして、ちょっと嫌」と話しており、相性が悪いことが原因でコンサルティングを辞めてしまったことは残念である。

3) 就職活動を妨げる厳しい経済事情

本学に通う学生は、出身地での就職を希望するケースがほとんどである。意欲的な学生の中には、全国に配属地をもつ企業や首都圏の企業への就職を希望する者もいるが、就職活動を行なうための経費が足かせになり、思うように活動できない現状が浮

かび上がった。

学生Aは、「都会にも行ったんですけど、試験だとか説明会とか、交通費だけでも大変でした。東京出ていきたいけどお金がない。一人暮らしは大変だし」と述べているように、説明会や試験に通うための交通費がかさみ、思うように活動できず、さらに、就職が決まっても首都圏での一人暮らしは経済的な不安があり敬遠してしまう現状が浮かび上がった。

(3) ブライダル専門職の問題認識

就職活動を行っていくうちに、ブライダル専門職の新卒採用が少ない、選考時期が遅いなどの問題点を認識することになる。意思が強く意識が高い学生は、焦らず、周囲に流されることなく就職活動を続け、求人が出た時にすぐ対応できるように準備している。しかし、不安や焦りから就職活動を早く終わりにしたいという気持ちになり、周囲やCCのアドバイスに流され、進路変更してしまう学生も少なくない。

1) ブライダル専門職の求人数と求人時期

結婚式場などの施設では、新卒採用をしても新入社員教育をしている余裕がなく、即戦力を求めて経験者を採用している企業が多いため新卒に対する求人が少ない。また、退職者が出てから補充採用を行っている企業も多く、求人時期が遅いのが現状である。

「ブライダルの求人が少ないことがかなり大きいですね。やりたいという気持ちもあるけど、求人が少ないからいつまでも決まらないという不安もあるし、周りがどんどん内定していく中で、憧れだけを持ち続けて就職活動に取り組めるほど、メンタルが強い方ではなかったの」と学生Dが話しているように、いつまでも内定でずにいることで焦り、さらに周囲に内定者が増えてくることで不安になり挫折につながると考えられる。

学生Fも「ブライダル関係の就職は、もう無理なのかなみたいな。求人がないのが一番ですね。中途採用が多くて、新卒じゃ無理なのかなって感じで。だからもし本当にやりたければ、中途で入ればいいかと」思って諦め、就職活動自体もやめてしまっ

た。しかし、卒業試験を終えて就職活動を再開した結果、ブライダル産業に内定することができた。

学生Gは「そんなに狭き門だとは思わずにいたから、就職活動してみて求人が少ないって知って焦りました。親とか周りに、大変じゃないのって言われて挫折しましたね。だから、アパレルとかでもいいかなって思いながらやっていたね」と話している。

就職活動によって初めて厳しい現実を突きつけられ、不安や焦りから精神的に弱ってしまう。そのため周囲からの勧めやアドバイスによって進路変更を余儀なくされる学生も少なくないのではないだろうか。

2) 諦めきれないブライダル専門職

ブライダル専門職の求人が少ないため、内定できないことで焦り、異業種に切り替えて就職活動を始める学生もいる。その場合、他分野への就職に対して学生自身が納得して気持ちの折り合いをつけ自ら進路変更していれば問題ないが、納得できずにいる学生は、ブライダル産業への就職を諦めることができないようである。

学生Dは、求人が少ないことで諦め、異業種の企業を受験することになっていたが、受験日になり辞退してしまった。CCからのアドバイスに納得したつもりだったが、当日になって気持ちの整理がついていないことに気がついたようである。

学生Fは異業種への就職活動を行っていたが内定できず、就職活動自体をやめてしまった。「最後の春休みになったから、もう1回ちゃんと就職活動しようと思って考えて。ここまで来たらやっぱりブライダルやりたくて探しました」というように、自分の気持ちを整理した結果、やはりブライダル産業に就職したいという思いが強くなったという。

学生Eも「求人少なくても全然諦める気はなくて。初めからの目標だし。とりあえず、決まってよかったです。今まで学んできたことが生かれます」と、入学当初の目的を果たすことしか考えていなかったようで、最後まで諦めずに就職活動を続けることができた。

(4) 就職活動に揺れる心

就職活動を通して自己分析や職業理解が進み、それを内在化することによって職業的社会化が行なわれたが、その過程では、焦りや不安、甘えなど、心が大きく揺れ動いていることがわかった。このような心理状態を把握し、その都度適切なアドバイスや指導を行うことが望まれるであろう。

1) 就職活動中の焦り、不安、甘え

進路セミナーは全体指導として行なっているが、学生は個別指導を望んでいることがわかった。希望進路が決まり積極的に活動している学生にとっては、進路や進度が違う学生同士が同じ指導を受けても効果的ではないと考えている。これは学生AやFの「進路が違う人たちが一緒にいるから、自分に必要でないことを話されてしまう。全体教育でやるものとそうでないものとをわけたほうがいいと思います」、「自分の進路とは違うことをやってるから、個別に対応してもらったほうがいいかな。みんな進度が違うし」という発言から読み取れる。自分に役立つ情報が得られないことで焦り、不安に感じてしまうようで、時には個別対応が必要であろう。

進路セミナーに消極的であった学生Eは、自分のためだけに指導をしてほしいという甘えから「個人指導でやってくれないと困るって感じです」と個別指導を提案している。

また、就職活動では精神的に落ち込んでしまうことが多いため、自分に関わる人に対して優しさを求めていることがわかった。学生Gの「CCの人、怒られてるみたいで怖い。くみ取ってくれる人がいるといい。優しい雰囲気だったり、女の人のほうが話しやすいです。進路指導室は話しやすい人がいると行きやすいです」や、学生Eの「私は個別に女の先生にお願いしたんですよ。自分に合ったタイプの人がいれば、気軽に相談に行かれます。女の先生のほうが相談しやすいですね。口調が強いと怖いんですよ」という言葉からわかるように、口調が強いことで怒られていると感じてしまい、結果的に進路室を敬遠することにつながっている。気持ちを汲み取ってくれと感じると、個別指導には足を運ぶようになった。

2) ゼミナール担当教員（以下ゼミ担任）の役割

本学では1年次よりゼミナール制を布いており、ゼミ担任はいわゆる高等学校のクラス担任のような役割を担っている。学業や学校生活、就職など様々な相談に応じているが、就職活動では、緩衝材のような役目として効果が期待されることが示唆された。

就職活動は順調に進まないケースが多いため精神的ダメージが大きく、試験に合格できなかったことを報告することが負担になり、進路指導室から遠のいてしまう学生がいる。このような場合、進路指導室よりゼミ担任の方が相談しやすいようである。

学生Fは「心配してくれてるんだと思うし、わかるんですけど。自分も切羽詰まってるから、追いつめられてるように感じちゃう。そういう時にはゼミ担任の先生から、やんわり、どうって言ってもらったほうが楽だし話しやすい」と話している。また、学生Gも「みんなも決まりつつあるし、進路室行かないとなって思ったんですけど、行きたくなくて。ゼミの先生に進路室に行ってねって言われたのがきっかけです。言われなかったら、行ってなかったと思います」と、ゼミ担任との話がきっかけで進路指導室に通うようになった。

3) 就職活動からの逃避

就職活動が円滑にスタートできなかった学生Eは、ようやく活動を始めてもなかなか軌道に乗ることができず、卒業研究やサークル活動に専念することで就職活動から逃避してしまった。また円滑にスタートしながら、不合格が続きやる気を失ってしまった学生Fも、卒業研究に没頭して就職活動を中断してしまった。

学生Gは、就職活動を始める以前から逃避していた。「就職活動始めたくなかったですね。入ったばかりだし、進路室行くと、ある意味社会って感じで。まだ就職のこと考えたくなくて」と話していることから、間直に迫る社会そのものから逃避していることがわかった。

(5) 進路指導の課題と成果

第2報では、ブライダル専門職を目指して専門課程で学んできて途中で諦めてしまった学生について、就職活動を始めた時点から深く関わる進路指導室の影響が大き

く、特にCCとの関わりが課題であった。今回の調査でもコンサルティングについての課題が浮かび上がったが、進路指導室の利用方法については成果も確認できた。

1) キャリアコンサルタントへの戸惑い、不信任感

学生Bのように、コンサルティングが有意義であった場合は、進路変更によってブライダル専門職を諦めたとしても結果に納得が得られている。しかし、進路先を変更するようアドバイスを受けたことで戸惑い、それが不信任につながり就職活動に影響してしまった学生がいたことは残念である。

学生Aは自分の進路をしっかり決めており、その結果、自分の求めている答えが返ってこなかったり、人によって言っていることが違ったりすることで不信任感を抱いてしまった。そのことは「キャリアコンは2回くらいしか行ってないです。人によって言っていることがあまりに違うのでどっち信じればいいのか、みたいな。基本は一緒じゃないと困るんですね。もう別にキャリアコンに頼らなくても自分で決められるし」や「キャリアコンの方から言われたことが素直に、すっきり自分の中に落ちることがあんまりなかったっていうことですね。多分求めているものが返ってこないというか」という言葉からわかる。さらに「もう今日やることないね」と言われたことが不信任につながってしまった。

学生DはCCからのアドバイスで一度は進路変更したが、諦めきれず再度専門職に挑戦することにした。「キャリアコンは全く受けてないですね」と述べており、「行ってもまた、こういう道もあるけどとか、こういう求人もあるけどって言われる」ため、同じ過ちを犯さないための手段として、コンサルティングは受けないようにしていた。また、アドバイスの中で「それじゃだめだね」と言われることがあり、その言葉に抵抗感があったという。

学生Fは「キャリアコンは1回しましたね。ブライダル関係の求人がないから、よそも見たほうがいいって言われて。結局は、違うほうへ誘導されてるような感じがして、信じられなくなっちゃいました」と、誘導されていると感じ不信任感を抱いてしまった。

学生Gも「自分のペースじゃなくて、CCのペースだったからついて行かれなかつ

た。それで放棄しちゃったから、進路室にも行きづらくなっちゃって」と、CCとのペースが合わないことに戸惑い、それを契機に進路室にも行かれなくなってしまった。

コンサルティングを受けなくなってしまった学生に共通しているのは、CCに対する不信感であることが示唆された。

2) キャリアコンサルタントの情報不足

CCであっても全ての業種や職種に精通しているわけではない。それだけに、全ての学生の求めに応じたアドバイスを行うことは難しい。しかし、学生の希望する情報については、収集する努力が必要であろう。

学生Aはブライダルの学びを通して見つけたアパレルへの就職を希望し、内定することができた。就職活動はアパレルに絞って行なっていたが、的確なアドバイスをしてもらえなかったことに不信感がつのってしまった。「アパレルを受けることに対するアドバイスっていうのはなかったです。例えば他にもアパレルでこういうところもあるとか、受けるときの注意とかがあれば、本当はよかった」と振り返った。さらに「アパレルの情報が足りなくて、自分でやったほうがいいなって」とCCの情報不足を指摘していた。

3) 受け身の進路セミナー

就職活動は自分自身のために行なうものであるが、自ら積極的に行動できず、受け身の姿勢になっている学生がいた。

学生Eは「セミナーは受けてましたけど、全然なんか受け身で。すごい嫌だったです。ちゃんとやしないとブライダルの仕事には就けないわけですけどできなかった」と話している。さらに「毎回進路セミナーすごい嫌でしたね。めんどくさくて全然おもしろくなかった」と述べており、就職活動が自分のためであることが理解できていないことが窺える。

学生Aはセミナーの様子を「受け身で出席している学生が多いので、多分みんな寝てたり、携帯いじってたりして聞いてないと思うんですよ」と分析している。

4) 進路指導室の利用方法

進路指導の成果として挙げられるのは、進路指導室の利用方法である。進路セミナーやコンサルティングを敬遠している学生は、進路指導室にも立ち寄れなくなることが多い。第2報では進路指導室に対する風評が学生を遠ざけていることを示唆していたが、今回の調査では、学生の支援を行う場所であると理解され始めていることが確認された。

学生AもEも「履歴書やエントリーシートを書いたときの添削はY先生」に依頼していたようで、「話しやすいからY先生のところに行って全部相談しました」と話しており、学生への個人指導を丁寧に行なった結果、相談しやすい場所であることが認知され、利用状況の改善につながった。さらに、学生B「進路指導室ってただ入るだけは怖いから、入りやすい雰囲気づくりは重要ですね」、学生G「キャリアコンは自分のペースに合わない人がいるけど、Y先生は話しやすく自分の希望もある程度くんでくれて。そういう人がいると救われます」と話しているように、今後は、さらに相談しやすい環境作りが必要であろう。

(6) 進路指導室に求めるもの

昨今の新卒採用状況は厳しく、就職活動において精神的なダメージを受けている学生が多い。このような状況の中、学生はどのような進路指導を求めているのであろうか。

1) きめ細かさが必要な進路指導

学生Dは「進路室からのメールに、季節のあいさつとかあると、何かほっとするとか、和みます。そういうきめ細かいところがいいですね」と、緊張を和らげるような言葉に安心感を覚えており、きめ細かな対応が望まれていることがわかる。

学生Bは「2年生が1年生に経験談を話したらいいと思います」や、「試験問題についても、分野ごとになっていう方がうれしいですね」と発言しているが、上級生のリアルタイムの情報や、細分化された情報をきめ細かく伝えてほしいと考えていることが読み取れる。

2) 就職活動に対する進路室と学生との気持ちのギャップ

就職活動が軌道に乗らなかったり、なかなか内定が得られなかったりすると、少しずつやる気を失い、活動を停滞させてしまう。進路指導室としては、早く内定を得られるように求人情報などを配信したりコンサルティングを実施したりして支援を行なうようにしているが、学生にとってはそれが負担になっていることがわかった。

学生Fは、早い時期から就職活動を行っていたが内定することができず、途中で一度諦めて活動をやめ、進路指導室にも行かなくなってしまう。その時の気持ちを「もうやりたくなくて、就職活動を。進路室からメールきてたけど、連絡をとるのも嫌で。なにしろ就職活動に関わるのがもう嫌だったんです。別に進路室が嫌だったわけじゃないけど、進路からのプレッシャーを感じましたね」と話している。矢継ぎ早にメールを配信したり、コンサルティングを実施したりするのではなく、少し間を空けることで気持ちの整理を促し、進路指導室と学生の気持ちのギャップを埋めることが必要であることが示唆された。

(7) 実践的な授業や学内外の活動による成長の跡

短期大学2年間の学びの中で、ブライダル専門職に関わる専門的な技術や知識、社会参加へのレディネスとしての態度やマナー、ルール、コミュニケーション力を内面化するのに役立ったものは、実践的な授業や学内外の活動であることが今回の調査で裏付けられた。

1) 体験学習で進んだ自己分析

専門課程の授業でも科目の好き嫌いという程度の自己分析はできているが、業種や職種に対する適性を知る上で役立つのはインターンシップであった。これは第2報の調査でも示唆されたことであるが、今回の調査で対象とした就職活動が停滞してしまった学生でも同様であったことは注目すべき点である。

学生Aは「インターンシップに行くまではブライダルって思っていたけど、行った先の式場で、あたしこれ違うって思いました。それで、もともとファッション好きだったなって目覚めてアパレルにいきました」と、これまでの聞き取り調査でも話し

ていたように、インターンシップでの体験により適性を見極め進路変更していた。

学生Gは、就職活動が停滞し、コンサルティングやセミナーにはほとんど参加しなかった。「貸衣裳屋さんにインターンシップ行ったことで、衣裳じゃないなと思いました。だから、授業で学んだプランナーの仕事を本当にやりたいなって思いました」と語っており、インターンシップでの経験が自己分析につながり、適性を見極めるきっかけとなっていた。進路指導に対しては抵抗感がある学生も、インターンシップのような体験型の授業に対しては素直に受け入れられることを示唆している。

2) 体験学習やサークル活動による職業理解の深化

体験的な学習は自己分析に効果があることが示唆されたが、一方で、仕事内容を理解する上でも効果的である。

2年生後期に、ブライダル関連科目の集大成として、それまでに習得した知識や技術を駆使して結婚式、披露宴を企画し実演する実践的な『ウェディングセレモニー』という授業を開設している。学生Aは「ウェディングセレモニーの授業で一通り企画までまとめてやったときに、こういう仕事もいいかなって改めて思いました。企画してみんなに指示して、終わった時の感動。やっぱりコーディネーターやりたいんでしょいうね、将来」と語っており、この授業で責任者を務めた結果、将来の仕事として再びブライダルコーディネーターを目指す気持ちが芽生えた。

学生Dは「コーディネーターになれたのはブライダル研究会MIP（以下MIP）の体験のおかげです。裏方の仕事も全部やって、たくさん学ぶことができました」、また、学生Gも「MIPの活動で、スタッフの動きとか挙式の流れとかよくわかりました」と発言していることから、サークル活動での経験が職業理解の深化につながったことが確認された。

学生Eはインターンシップの経験が職業理解につながり適性が見極められたようである。「インターンシップって、自分の進路を決めたりする時とか、やっぱり影響ありましたね。インターンシップとかホテルでのアルバイトを経験したことで、やっぱりこれ違うって思えたから、きちんと進路が決まりましたね」と話している。

3) 体験学習やサークル活動による就職への動機付け

専門課程の教授内容に密接に関係するサークル活動や、実践型、体験型の授業での経験は自信にもつながり、貴重な体験をしたという認識を持った学生は、ブライダル専門職に就くことへの強い動機付けとなっていることがわかった。

学生Dは「ブライダルの勉強と、インターンシップとかMIPの活動がうまく連動して、それを生かしていこうという気持ちになったんです」と語っているように、授業での学びが体験や実践を通して具現化し就職へ結びついた。

学生Fは「サークルの活動を通して、さらに職業として考えるようになりました。サークルで模擬挙式やった時に、やっぱりこういう仕事で良かったらいいなって思いましたね」と、MIPのサークル活動での経験が職業理解を促すと同時にブライダル専門職を諦めずに目指すことへの強い動機付けになっていることがわかる。学生Gも「MIPに入って、実践的な授業でも、企画して、それをみんなで協力して作り上げるっていうのは、今後もしブライダルの仕事に就いたら生かせそうです。コーディネーターの仕事は憧れだし、諦めずに目指します」と、サークル活動が専門職に就くことへの動機付けとなった。

4) 体験や実践で進む職業的社会化

体験や実践が専門職へ就くことへの動機付けになっていることが示唆されたが、さらに社会参加のレディネスを備えるには体験的授業やサークルやアルバイトなどの学内外での活動が効果的であることがわかった。

学生Aは「将来ブライダルの仕事に就きたいとか、転職したいって考えた時、アパレルでの仕事は土台として役立つと思います。今してるアパレルのアルバイトは社会に出る上で勉強になります」と話しており、接客の仕事で培う会話力やホスピタリティが、ブライダル専門職に必要な価値や態度として理解され内面化しようとしていることがわかった。

学生Dは、サークルでの経験が自分のブライダルコーディネーターの仕事に役立つと考えている。「MIPでの経験は、ブライダルの仕事に生かされますね。ブライダルの勉強にも役立ちました。教科書に書かれている文章よりも、実際にやって目の当た

りにすることで覚えやすかった。モチベーションも上がったし、団体行動の中での経験は社会人に必要なことだし」と話しており、サークル活動を通じてブライダルの仕事をしていく上で心構えができ、専門的な知識を得ることができたようだ。学生Eも同様に「サークルでは自分たちで一から企画して結婚式を作り上げたので、将来生かせると思います」という言葉から、サークル活動での経験がブライダルの学びを深化させるとともに将来の仕事にも役立つと考えていることがわかった。

学生Bはサークル活動が直接仕事に活かされるわけではないが、副サークル長を経験して「人の先頭に立ったり、まとめるのは苦手な嫌だって思ってたから、副サークル長になるのは不安でしけど、頑張ったらできました。社会に出るにあたってプラスになりました」と、サークル役員としての活動が、社会人としての資質を磨くことにつながった。

5) 体験学習により得られた学びに対する充実感

ウェディングセレモニーという授業では、実際の結婚式に近い形で実践できるため、仕事のイメージがしやすく、学生たちにとっては大変な刺激と充実感が得られたようである。

学生Fは授業進行の責任者であったため、他の学生以上に充実していたことが次の発言から読み取れる。「ウェディングセレモニーで責任者やって大変でした。でもやりきったって感じで、充実感とか、達成感がありました。ブライダルで学んだことが生かしたし、やってきたことを全部出した、これだけ頑張って勉強してきたんだっていうのが見えました」。

学生Eも「ウェディングセレモニーもサークル活動と一緒にですね。企画をして、みんなで作くり上げて、苦労したことも、やっぱり将来生かされると思います」という言葉から、充実感や達成感が得られていることが感じられ、同時に一緒に頑張ってきた仲間との連帯感も生まれ、それが将来の仕事にも生かされると考えていることが窺える。

学生Gは、「体験ができるような授業は理解が深まります」と話していることから、体験により学習が深化しており、それが充実感につながっていることがわかる。

(8) 学んできたことの意味づけ

ブライダルフィールドを専攻している学生は、ほとんどがブライダル専門職に就くことを目標としているが、就職活動をする中で職業理解が深化したり、問題認識をする中で異業種に就職してしまう場合もある。就職先が専門職か否かに関わらず、短期大学で2年にわたって専門課程の知識や技術を習得してきたことに対して肯定したいという気持ちが働いていることがわかった。専門職に就いた学生は、仕事に役立つ知識や技術を習得することができたという自信になり、検定試験合格に向けてのモチベーションにつながっていた。一方、異業種に就職が決まった学生は認知的不協和を解消するために、学んできたことへの意味づけをしていた。

1) ブライダル専門課程での学びに対する充実感

ブライダル専門課程での学びに対しては、一様に皆「楽しかった」と話している。勉強が苦痛ではなく、興味のある分野の知識を習得することが新鮮で、モチベーションを維持することは難しくなかったようである。

異業種への就職が決まっている学生AとDは、結婚式をプロデュースする実践的な授業が最も楽しく、達成感を味わうことができたと言った。この授業を履修した結果、卒業後すぐにではないが、将来の仕事として再びブライダル専門職に挑戦したいという気持ちになったようだ。

学生Fは「ブライダルの勉強したくて来たわけだし、ブライダルの仕事がしたかったですね。学んでも苦じゃないし、ABC試験頑張ろうと思いました。自分のためになったし、勉強になりました」と話しており、興味のある分野での学びが自分にとって最もためになり、自分の選択した進路が間違っていなかったことを確信していた。

学生Eは「短大でよかったことは、ブライダルを学べたことですね。それを学ぶために入ったんで。それが生かされる仕事でよかったです」と、当初の目的であった専門課程での学びを仕事に生かすことができ、目標を達成できたことが充実感につながっていた。

どの学生も目的を果たすための努力は惜しまず、最後まで興味を失うことなく前向きに学んでいたことが窺える結果となった。

2) 検定試験に対するモチベーション

アシスタントブライダルコーディネーター検定試験（以下ABC検定）は、2年生の後期の期末試験後に実施されるため、モチベーションを保ち続けることは難しいと推測していた。特に、異業種への就職が決定していたり、専門職を諦め異業種での就職活動が進行中であったりする場合は難しく、ABC検定を受験しないという可能性もあると懸念していた。しかし、学生は置かれている状況に関わらず、ABC検定に対してのモチベーションを維持していることがわかった。

学生Aは「ABC検定は就職先には必要ないけど、それを取ることに対しては全然抵抗もなく、短大入った目的だからテストよりも頑張りました」と話しており、入学当初の目的を果たすことで、短大に入学した意義を見出していた。またAは「ABCの資格ほしいです。アパレルやめたらブライダルへ行くかも。今でもどこかにブライダルの仕事いいなっているんで」とも話しており、将来の仕事のために努力している様子が窺えた。

さらに学生Bも「ブライダルとは違う職種内定しちゃったけど、ブライダルの授業とか検定試験に対してのモチベーションは変わらなかったです。意欲的でした。就職先も、そこで一生やるかはわからないし」と述べており、いずれ役に立つかもしれないという気持ちがモチベーションにつながり、学んできたことは無駄ではないという思いが窺える。

学生Gは、「せっかく2年間ずっと学んできたし、検定取るためにこの学校にも来たんで、ABC検定は絶対に受かりたいなと思ってやっていました。就職諦めつつあるけれども、検定取ったら有利だと思うからがんばります」という言葉から、A同様入学当初の目的を果たすことで、短大に入学した意義を見出しているとも感じられるが、同時に就職活動がモチベーションを維持させていることが窺える。

学生Eはブライダル専門職に内定しているため、それがモチベーションにつながっていると思っていたが、「やっぱり内定したからっていうのもちょっとあるけど、ABC検定は入った時からの目標だったから絶対受かりたかった。学んできたことを将来生かそうと思って頑張りました。入学時の目標だったわけで。仕事に就くことも、もちろんですけどね」と、学生AやE同様、短大での学びを意義あるものにしたいと感じ

ていることがわかった。

3) ブライダル専門職内定によるモチベーションアップ

ブライダル専門職に就くことができた学生は、内定により短大で学んできたことを有意義と感じているが、さらに授業や期末試験、ABC検定に力を入れる動機付けになっていた。

学生Dの「卒業後ブライダルの仕事に就くので頑張ろうと思いました。ブライダルに内定が決まったことで、やる気が増しましたね」という言葉からは、内定により自信をつけ、さらに意欲的になっていることがわかる。

4) 視野が広がった2年間の学び

学生Aは専門職への就職は果たせなかったものの、ブライダル専門課程で学ぶことを目的として入学した短大での学びには充実感があり、自己肯定感から自信がついたことが感じられた。「基本的には2年間の中で自分のやりたいことはできました。いろいろ視野は広がったと思います」と、視野の広がりとして折り合いをつけた。

5) 卒業研究は学びの集大成

2年生は自分で定めたテーマに沿って卒業研究に取り組むことになっている。ブライダル専門課程で学ぶ学生は、ほとんどが学びの集大成としてブライダル産業に関わるテーマで研究を行ったが、卒業後の進路に結びつくようにテーマを選んだというより、学んできたことを生かしたいという思いが強いことがわかった。そして研究論文を書き上げた後に達成感を味わい、仕事にも生かせるという自信につながっていた。

学生Aは「ファッションも興味あったけど、学んできたことを生かしたくて、ブライダルにテーマを絞りました」と話しているように、就職先に関係するファッションに特化するのではなく、習得した知識を生かせるブライダル関連にテーマを絞っているのがわかる。

テーマがブライダル関連であった学生は、「ブライダルの授業を受けていたからこそ」、「学んできたことが生かせた」、「ブライダルの学びの延長」と、みな同様に、授

業で習得した知識を基に研究を進め、2年間の集大成として論文をまとめていることがわかった。

学生Bのテーマはブライダルではないが、教養の学びの中からテーマを発見した。「現代女性とキャリアっていう授業の中の女性の生き方に興味を持ったんですね。テーマはそこからです。卒業研究は授業の続きみたいな感じだったんで、つながりました、学んできたことが生かせました。ブライダルとはちょっと違いましたけど」と話している。

重要なのは、学生はみな「学んできたことを生かして論文を書き上げたことで達成感や充実感を味わうことができた」と話している点である。短大で学んできたことの意義を見出し、証を残すことができたという自己肯定感から自信につながったと考えられる。

(9) 短大進学は積極的な選択

大学全入学時代と言われる昨今、四年制大学への進学者が増加する一方、短大への入学者が年々減少傾向にある⁴⁾。そのような状況の中、短大へ進学する学生は、経済的な事情や学力、専門学校との競合、地方のため選択肢が少ない等、消極的に選択していると考えていた。しかし、専門課程に在籍していた学生は目的意識が明確で、積極的に短大を選択しており、2年間という短い期間で凝縮した充実感ある学生生活を送ったことがわかった。

1) 2年間だからこそ充実していた短大生活

2年間という短い期間ではあったが、調査に協力してくれた学生全員が充実した学生生活を送ったと語っている。注目すべきは四年制大学と比較している点で、短大を選択したことが正解だったと話している。4年間かけて学生生活を過ごすより、2年間で興味のある分野について集中して学び、目的を果たすことの方が充実していた、と語っている。

学生A「短大生活2年間は充実していました。4年制じゃなくて短大でよかったと思います。いろいろ学べる学校だったので、短期間でも視野が広がったし」、学生D「4

大とか短大とかじゃなくて人間性が重視されていると思ったので、2年も早く就職できて社会に出られるのはよかったと思います。2年間で凝縮されて充実してました」、学生B「4年じゃなくても2年間の中で凝縮してたいし充実してました」、学生F「濃い2年間でした」、学生G「四年制に行くよりも濃い学びができたかなって思います」、学生E「検定試験も取ったし。勉強も頑張って、2年間充実してました」というように、専門職に必要とされる知識や技術、社会人としての態度やマナーなど、2年間でほとんど習得したという充実感と、自己肯定感による自信が感じられる。短大進学への満足感が得られたことで、四年制大学との比較をしながら、自分の選択が間違っていないことを確認しているように感じられた。

2) 専門学校より魅力的な短期大学～選択肢が多い短期大学での学び～

昨今の経済事情による影響で就職内定率が厳しくなっているためか、職業教育が主である専門学校への進学を希望する学生も少なくない。そのような状況の中で、専門学校ではなく短期大学を選択した理由は教養課程にあった。

学生Fはブライダル専門課程で学ぶため、専門学校と迷った末、本学への進学を決めている。「ブライダルの専門学校と、短大と迷って。高等教育機関だし、ブライダルだけでなく一般教養とか、いろいろ勉強できるっていうことが決め手です」と語っている。さらに「前期は司書も取ろうと思ってました。せっかく短大入ったから、他の資格とか勉強もしてと思って」と話しているように、一般教養科目が修得できる上、選択した専門課程の他にも様々な分野の学習が可能であることが魅力になっていることがわかった。

(10) 仕事と学びの切り離し～将来の仕事としてのブライダル～

第2報では、仕事のためではなく、「将来結婚する自分のため」にブライダルの知識を内在化していることが示唆されたが、卒業を目前にした今回の調査では、ブライダル専門課程の学びやABC検定に対して、「将来の仕事のため」に努力していたことがわかった。

学生Aが「将来の視野の中にはブライダルの仕事があると思います。コーディネー

ターかはわかんないですけど。多分結婚式に関係する仕事に行きそうな気がします。やっぱり授業やってきたり、サークルをやってきたりしたから、気持ちがずっと維持できてます」と述べていることからわかるように、卒業後すぐにブライダル専門職に就かない学生でも、将来の仕事として視野に入れることで仕事と学びが結びつかないことを割り切っていた。

学生Bも同様に「転職のときとかまだ視野に入れて考えてて。資格っていうのは将来の自分のキャリアデザインの中で、やっぱり必要だなと思って。で、興味のある仕事の中の一つがやっぱりまだブライダルの仕事だっていうことです」と、将来を視野に入れていた。

学生Fも「将来ブライダルの仕事をしたいっていうのが延長線上にある」ため、授業も就職活動も諦めずに努力したと述べていた。

第2節 図書館司書課程学生

(1) 第3回調査の概要

図書館司書課程を履修する2年生3名に対して、半構造化インタビューを実施した。3名のうち1名(Aさん)は3回目、1名(Bさん)は2回目、1名(Cさん)は初めてのインタビューとなる。Aさん、Bさんは図書館司書資格、学校図書館司書教諭、中学校教諭2種免許(国語)を取得中であり、Cさんは図書館司書資格のみ取得中である。⁵⁾インタビューは2012年2月と3月に実施した。インタビュー時間は一人につき、30分から1時間以内である。インタビューにあたり、本人の許可を得た上で録音し、文字に直した。

表3 インタビューの属性

氏名	学年	取得中の免許・資格	インタビュー回数(通算)
Aさん	2年	図書館司書・学校図書館司書教諭、 中学校教諭2種免許(国語)	3回
Bさん	2年	学校図書館司書教諭、 中学校教諭2種免許(国語)	2回
Cさん	2年	図書館司書	1回

このデータを質的分析ソフトMAXQDAにインポートし、分析した上でカテゴリを抽出した。

(2) 分 析

表 4 カテゴリ・コード表

カ テ ゴ リ	コ ー ド
進路指導の成果と課題	役だった進路セミナー キャリアコンのアドバイスへの戸惑い
幼児体験としての本と図書館	司書資格取得の動機
学校図書館への関心	読書指導に悩む学校司書 積極的な読書活動
「図書館戦争」の司書	入学前の司書イメージ
改善志向	弱点の改善 教育技術の向上心 後輩と親しくなる ボランティア活動の改善 試行錯誤の図書館サークル 向上心が強くなる
自信の芽生え	学業の集大成として卒業研究 子どもたちの反応を楽しむ 実践力を高めたアルバイト経験 サークルを立ち上げた自信 度胸がついた図書館実習
実践的な授業への関心	生徒指導論の学び レファレンスサービス演習の学び 実践力を高めたレファレンスサービス演習 現代女性とキャリアと先輩の話 自分の意見を伝える授業 レファレンスサービス演習への戸惑い
力量の認識と不安	学校司書になることへの不安 図書館司書になることへの不安
社会人としての心構え	相手の立場を考えるのが社会人 先輩としての自覚 仕事の体験と成長 自己コントロール生活

読み聞かせ力の向上	読み聞かせを自分のものにする
	読み聞かせや本の多様性
	読み方の多様性認識
司書業務の認識	肉体労働としての司書業務
	学校司書の幅広い仕事
	コンビニと図書館との類似性認識
	図書館を経営するという驚き
	色彩と図書館の関係認識
クライアントとの関わり	子どもとの関係深化
	子どもの読書ニーズを知る
	相手に伝える難しさ
	利用者コミュニケーションの難しさ
障害の克服	図書館実習依頼の失敗とひきずり
	最初の一步を踏み出す勇氣
人間関係の深化	人間関係に配慮した寮生活
	友達への注意
	友達への遠慮
	人付き合いを通じての学び
	協調性と我慢の寮生活

1. カテゴリ：「幼児体験としての本と図書館」「『図書館戦争』の司書」

これらのカテゴリはCさんのインタビューから抽出された。第一報の調査と同様に幼児の頃の習慣が高校生まで継続し、志望に至った典型的な例である。『図書館戦争』は図書館を舞台にした小説である。

である。『図書館戦争』は図書館を舞台にした小説である。

2. カテゴリ：「実践的な授業への関心」

2年の授業に対する関心を尋ねたところ、実践性・身近な問題を扱う授業に大きな興味を示していることがわかった。「レファレンスサービス演習」はレファレンス質問を学生自身が調査・回答する授業である。最初はどのように回答すればよいのか、分からなかった学生が多いが、経験を重ねると回答できるようになることが、知的な関心を高めたようである。また「現代女性とキャリア」では前年度の卒業生が来校し、就職関連の話をしてくれたことが、参考になったようである。年齢が近

い卒業生による、学生の目線に近い話が良かったようである。

3. カテゴリ：「学校図書館への関心」

前回の調査でもこのカテゴリは抽出されている。中学校の教育実習に参加したBさんは実習の合間に図書室をたずね、学校司書の経験や悩みを聴いている。Bさん自身は学校図書館への就職を希望しており、関心の高さが窺える。

4. カテゴリ：「読み聞かせ力の向上」

公立図書館におけるボランティア活動も1年近く経過し、自分たちの力が向上していることを認識している。また、2年前期の「児童サービス論」において、他の学生たちの読み聞かせを見て、その多様性に気づいている。その状況なかでさらに自信を深めている様子が窺える。

5. カテゴリ：「クライアントとの関わり」

読み聞かせ力の向上と関連の深いカテゴリである。ボランティア活動に伴い、学生の顔を覚えてくれた子どもたちも増えて来ている。そして子どもたちにも、本の好みがあることも理解できるようになってきている。

反面、1年次の公立図書館におけるインターンシップの「躓き」が尾を引いている学生も見られた。利用者とのコミュニケーションが上手にできなかったということである。しかし重大なミスではなく、日常的に見られる現象ではあるにも関わらず、学生本人には重大な失敗経験として位置づけられている。この問題は後で詳細に分析することにする。

6. カテゴリ：「改善志向」

ここでは現在の状況をよりよくしようとする意欲と活動が見られた。その状況は教育実習における教育技術の改善、サークルにおける先輩後輩関係の改善、ボランティア活動の改善である。今の状況を少しでもよくしようとする姿勢は3名共通に見ることができた。

7. カテゴリ：「自信の芽生え」

「改善志向」と同様に様々な状況における経験が自信に繋がっている。子どもたちの反応を楽しむという部分的な自信もあれば、2年間の経験と学びを振り返り、大きな自信になっているケースもある。

8. カテゴリ：「司書業務の認識」

このカテゴリは前回の調査でも見られた。コンビニエンスストアとの比較検討、学校司書の多様な業務など体験や授業などから認識を深めている様子が窺われる。

9. カテゴリ：「障害の克服」「人間関係の深化」「社会人への心構え」

これらのカテゴリでは社会人としての人間関係の作り方、困難にぶつかった時の対処法など基本スキルや考え方を自ら学んでいる様子が窺える。誰かに頼るのではなく、自分たちで解決して行こうとする姿勢も見られる。

10. カテゴリ：「力量の認識と不安」

卒業間近となり、実際に図書館司書職に就く段階になると、自分の力量と司書の仕事を比較し、できること、できないことを冷静に考えている様子が窺われる。「学校司書が他先生と連携してやっていったり、選書というのが怖いというのがあって、それだったら公共図書館で子どもたちがどんな本を借りて行って、どんな本を読みたがっているのかというのを実際に自分で知ってから、学校図書館に行った方がちゃんと選書とかもできるかなと思ったので」と語っている。この学生の場合は学校司書を希望しつつも、学校司書業務への不安から公立図書館司書へ路線転換したという事例である。これは今回の調査で初めて発見されたカテゴリである。

11. カテゴリ：「進路指導の成果と課題」

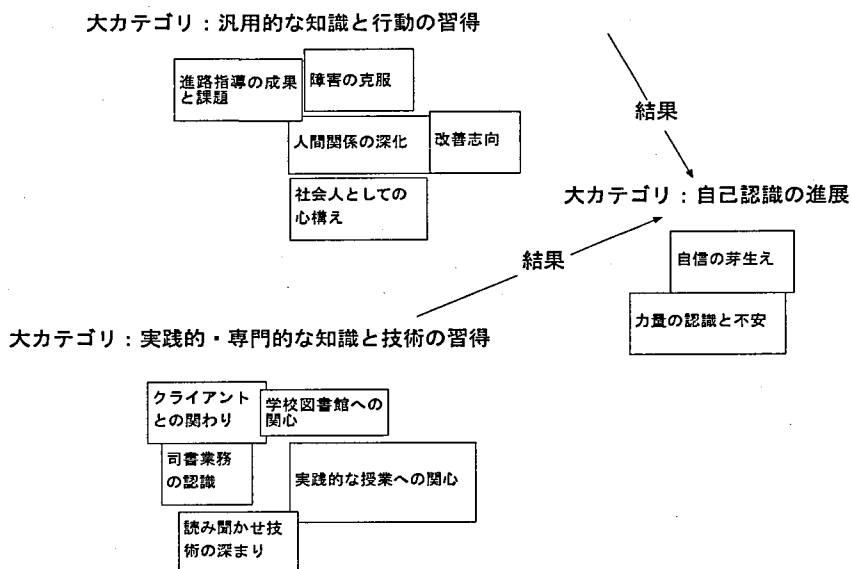
一連の調査対象となった学生は進路サポート室をあまり利用しないため、プライダル専門学生の調査に比較すると進路サポート室に対する言及が少ないのが特徴である。今回インタビューしたCさんの場合は一般企業を希望していたため、キャリ

アコンサルタントのカウンセリングを受ける機会が多かった。インタビューからは必ずしも自分の志向と一致しない職業を勧められ戸惑う様子も見られた。「こういう方面に行きたいなと思ったんですけど、キャリアコンに『介護いいんじゃないの』と言われまして、『なんでなんだろうな』と思いながら受けてみたりしたんですけど」と語っている。キャリアコンサルタントの対応が学生のニーズと一致していないことを示唆するコメントである。

(3) カテゴリ関連図

今回のインタビュー調査から抽出されたカテゴリを用いて、カテゴリ関連図を作成した。表のカテゴリを3つに分類し、それぞれの上位概念としての大カテゴリ3つを設定し、それを関係図に表現した。

図1 カテゴリ関連図 (第3回調査)



1. 大カテゴリ：汎用的な知識と行動の習得

「汎用的」という言葉は、司書、ブライダルコーディネーター、教員等、どのよ

うな職業にも通用するという意味で使用している。人間関係の構築は社会人の基本であり、チームワークの維持に必要である。これはBさんの次のコメントに端的に表れている。「最初はもう助けあって、傷のなめあいじゃないけど、いやなところもしょがないと目をつぶりながら、やってたなかで後輩がきたときにこのままでいいのかとなったときに、友達だけと駄目なことはだめと注意、甘えさせるのではなく注意できるようになったなと思いました」と語っている。また仕事の改善、困難にぶつかった時の対処などを実習、サークル活動で学んで来た。

2. 大カテゴリ：実践的・専門的な知識と技術の習得

このカテゴリは図書館司書としての専門的な知識と技術並びに実践への関心の高さを表すカテゴリをまとめた。本来ならば知識と技術は別ではあるが、学生たちの識としては専門性とは常に実践して身につけることが当然になっているためである。

3. 大カテゴリ：自己認識の進展

この大カテゴリを構成する、2つのカテゴリ「自信の芽生え」「力量の認識と不安」は今回の調査で初めて発見されている。2年間の学生生活と学業を終え、様々な経験を通じて、冷静に自分の力量を見極めようとする姿勢が窺える。「充実感もあったし、自分のためなところとか、あきらめていたというか、見ないふりをしていたようなことでもこれじゃいけないと思って、向上心が強くなったというか、そんな気がします」とBさんが語っている。

この「自己認識の進展」は「汎用的な知識と行動の習得」「実践的・専門的な知識と技術の習得」の結果として位置づけられる。

「学校司書が他先生と連携してやっていったり、選書というのが怖いというのがあって、それだったら公共図書館で子どもたちがどんな本を借りて行って、どんな本を読みたがっているのかというのを実際に自分で知ってから、学校図書館に行った方がちゃんと選書とかもできるかなと思ったので」。このコメントを語ったAさんは学校司書への就職を本来希望し、公共図書館における読み聞かせ活動、教育実習、図書館実習

にも積極的に参加してきた。しかし学校司書の職務の広さ、責任の重さを知り、方向転換して公立図書館へ就職した。この判断は自ら下したもので背景としてある。教育実習生として問題意識を持ち、学校図書館の実情を冷静に見て来たことがあると思われる。

「(図書館司書に) まだちょっと興味というかあれはあるんですけど、自分にほんとうにやっていけているのかと思ったのと、あんまり向いていないじゃないかと思ったのと、(利用者と) 話しているなかで言いたいことを伝えられないことしかなくて」と語っている。これはCさんのコメントであるが、公立図書館におけるインターンシップで、利用者とのコミュニケーションに苦勞したこと述べているのである。現場で実際に体験したことをその仕事に就くかどうかの判断基準にしている。

また、「自信の芽生え」では、「図書館実習はたくさんの人の前で読み聞かせをしたので、度胸というか、立つことに緊張しながら、毎回していましたし、回数こなしていくことで声も通りやすくなったりとか、反応をみる余裕がでてきたので度胸がついたかな」。これはBさんのコメントであるが、学校図書館実習を通じて、人前に立つことが苦痛にならなくなったことを述べているのである。他にサークルを立ち上げたこと、ボランティア活動では余裕もって子どもたちと接することができるようになったことなど実践からくる自信も見られる。また卒業研究を仕上げたことは学業面での自信につながっている。

第4章 まとめ

この章ではブライダルと司書それぞれについて考察し、両者についての比較検討を行う。

第1節 考察(ブライダル)

(1) カテゴリ関連図

カテゴリの関連を表したものが図2である。

コアカテゴリを「実践的な授業や学内の活動による成長の跡」と「学んできたことへの意味づけ」に設定した。

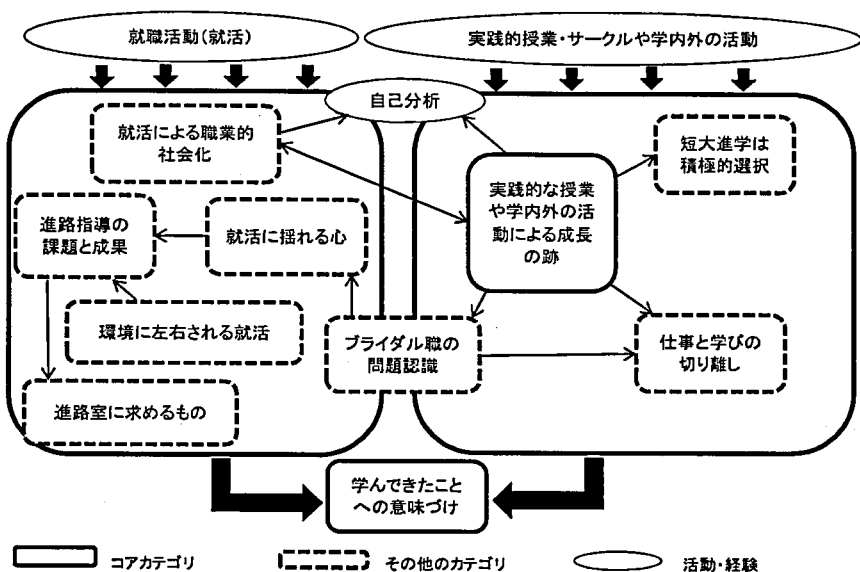


図2 カテゴリ関連表

2年間の専門課程の中で学生を最も成長させたのは、実践的な授業やサークルなどの様々な活動であり、その結果、職業理解の深化や職業的社会的化が行なわれ、短大での教育課程に充実感を覚え、自己肯定感による自信につながったことが確認された。職業選択の際の動機付けにも効果的であったこともわかった。さらに、就職活動によっても、社会人としてのレディネスが備わり職業的社会的化が進んでいる。そして、実践的授業や学内外の活動、就職活動を経験した学生は、社会で汎用可能な知識を身につけることができ、自信をつけている。その結果、短大の専門課程で身に付けた知識や就職内定に対する満足感や充実感が、短大進学そのものの肯定につながり、認知的不協和を解消することにもつながっている。学生たちは、様々な経験の中から、短大で学んできたことへの意味づけを行っていることが示唆された。

就職活動によって職業的社会的化も行なわれたが、学びの中での経験がより効果的で有意義だったことが裏付けられた。

(2) おわりに

進路指導については、課題も浮き彫りになったが、同時に成果も確認された。学生が進路指導室に求めるものは、優しさやきめ細やかさ、全体指導より個人指導であり、学生の進路や進度に応じてカスタマイズする必要性があることが示唆された。

専門課程に学ぶ学生は、国家資格の有無に関わらず、目的意識が明確であることが確認された。そのため、教授内容と将来の進路が結びつくことが重要である。教育課程に対しての満足感や充実感も必要であろう。今後は、学びの中で、如何に職業的社會化を促す経験をさせていくか、また、如何に円滑に就職活動を行なわせるかが重要であると考えらる。

第2節 考 察 (司書)

1年にわたり司書課程の学生を対象に調査を実施してきたが、ここで全体的なまとめを行う。

職業的な社會化とは職業の知識や技能を身につけるとともに、職業上の地位に附属する価値や行動を自分のものとして内面化していくプロセスである。それ同時に社會のあ構成員としての自我が確立して、社會からの認知を得て、自己の成長を促して行く。

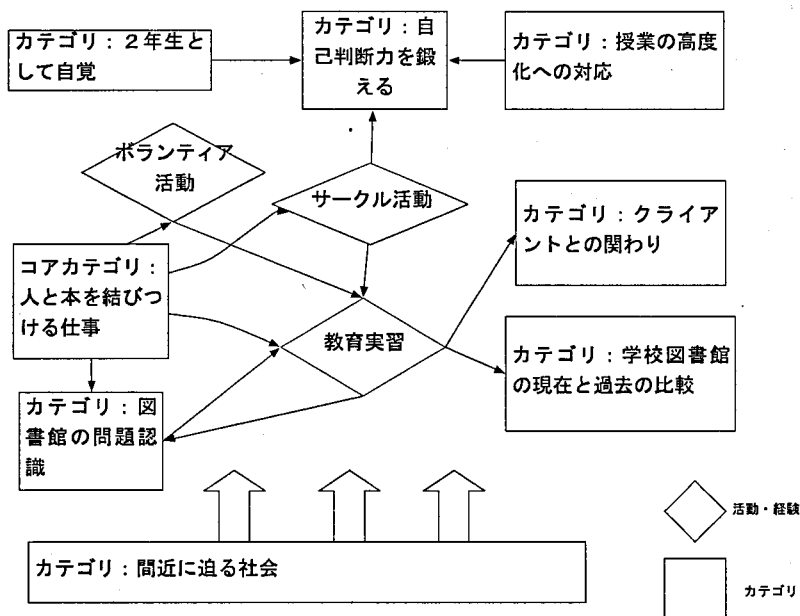
このような定義に沿って見て行くと、学生の成長プロセスの中心になっているのが 自分で考えて何かを体験することが成長を促していることがわかる。

次ページの図は第2回調査から得られたカテゴリ関連図である。

1年次3月調査の時点は知識の習得及び職業的な価値観の内面化があまり進んでいなかった。しかし2年次以降サークル活動の本格化、公立図書館におけるボランティア活動、教育実習、図書館実習を途切れることなく経験する。また授業がより専門化・高度化する。その状況のなかで自ら考えて、試行錯誤をして行く。これが自己判断する態度を身につけ、社會人としての自立的な行動の基礎を形成していくということがわかった。

そして今回の第3回調査では第2回調査との共通点も見いだされている。クライアントとの関わり、司書という仕事への関心の高さなどがそうである。そしてさらに専門的な知識と技術を身につけ、ボランティア活動、サークル活動の進展が大きな自信

図 3 カテゴリ関連図（第2回調査）



に繋がっている。それとともに身に付いた知識技術の限界も理解し司書になることへの不安に言及している。

第2回調査ではカテゴリ：「間近に迫る社会」で学生生活と社会人になることへ乖離が見られた。しかし第3回調査では冷静に学生生活で培った能力と社会で必要とされる能力を分析し、進路変更している（Aさんのケース：学校司書から公立図書館司書へ変更）この時点で漸く学生から社会人になるという実感がわき、自覚ができてきたのだと言えよう。

（5）短期大学教育への提言

今回の一連の調査対象となった学生のケースは限定的ではあるが、一般化可能な知見が得られたと考えている。

1. 体験の重視

インターンシップ、図書館実習、教育実習、ボランティア活動などの経験が職業的社会化の進展に役立っている。総合文化学科の場合、学生によっては2年間で1回のみの可能性もある。一年次のインターンシップで終わってしまうことがないように様々なプログラムを用意し、参加を促していくことが重要である。

2. 体系的な体験プログラム

切れ目なくプログラムを用意するとともに、プログラムに参加し、そこで得られた課題を次に参加するプログラムで解決・発展させるように促すこと。

3. 自主性の尊重

ある程度の失敗を許容し、学生自身で試行錯誤させるように促すこと。

4. 学生個人へのサポート

体験プログラムにおける失敗が尾を引いてしまうケースも発見されている。例えばその失敗がどの程度の影響があるのか、どのようにすれば回復できるのか、気づかせるように仕向ける工夫が必要となる。大した失敗ではないにも関わらず、大きな問題として心の中に閉じ込めてしまうことは自己効力感の低下をもたらし、職業的社会化の阻害要因になりうる。一つのプログラムの終了後に個人面談を行い、成功・失敗体験を語らせ、教員が適切なアドバイスをすることが必要である。

5. 授業における実践性を高める

学生は知識を伝授されるだけでなく、自ら問題を解決し、その達成感を味わうことを求めている。それが小さな自信の積み重ねとなって、自己効力感を生み出す源泉となっている。一年次は基礎的な知識の伝授が中心となるが、二年次は実践性の高い授業内容を工夫する必要があると思われる。形態としてはワーキンググループ、内容としては課題解決型の学習・研究を進めていく必要があるだろう。

第3節 最後に

専攻の異なる学生を比較してきたが、職業的な社会化を進展させる要因はほぼ同じであった。それは学内外の活動や実践性の高い授業への参加である。ふたつの職業は職業としての目的も、対象とする顧客もまったく異なっており、当初は全く異なるプロセスを辿るのではないかと予測していた。しかし上記以外にも多くの類似点が発見された。なぜ両者の職業的社会的プロセスは似ているのか。今回の研究はそこまで踏み込むことはできなかったが、今後の研究課題としたい。

なおこの1年の間、何回もインタビュー調査に付き合ってくれた学生の皆さんに心より感謝します。(了)

【注】

- 1) 山村健、天野郁夫編「青年期の進路選択：高学歴時代の自立の条件」(有斐閣新書) 有斐閣、1980年 p88～90
- 2) 宮脇美保子他 「4年制大学における看護学生の職業的社会的化：1年次の学生を対象として(第1報)」医療看護研究 2(1), 53-58, 2006-03
- 3) 木内公一郎他、短期大学生の職業意識の変化 フライダル専門学生と司書課程学生の比較研究(第1報)、上田女子短期大学 観光文化研究所 所報第9報(2011) pp1-25
- 4) 文部科学省「学校基本調査」年次統計 平成24年2月6日発表『在学者の推移』
 - i B.G.グレイザー, A.L.ストラウス, 後藤衛他訳, データ対話型理論の発見, 新曜社, 1996年
 - ii 3名とも図書館サークルに所属しており、公立図書館における読み聞かせボランティア活動に従事している。